

「オー爺さん」
 「お名主様」
 「エライ事して呉れたなア」
 「ナアニ、さあ少しも早う渡りませう、どうせ此奴等弱い者青め私等小前者の役に立つ奴じやねー、此奴のために罪なき身で、牢屋の苦しみを受くる人も幾十人か解らねー、印旛沼の水難炊此奴の往生に格好で御座りますだ」

何氣ない様に言つて權の手を動かして居る甚兵衛の、其の眼の中に
 「既に覺悟の睡が据へられた。
 『それで爺さん、後の始末は』
 宗吾は不安相に聞いた、
 『心配なされませんが、チャンと此爺が心得て居ります』
 『何だか氣にかゝるが、夜が明けたら一大事』
 と向ふ岸へついた時宗吾は懸念相に云つた。
 『それでは爺さん、随分健壯で』
 『お名主様、それではお前様も御身體を大切に』
 『さらば、爺さん』

「左様ならば」
 岸に飛び上つた宗吾は別辭もソコ／＼に、向ふ風を笠に受けながら雪を蹴つて一散に駆け出したが、森の彼方へ隠れるまでに、懐し氣に二三度、四五度、笠に手をかけ此方を見返つた。
 其兵衛は堤に上つて、宗吾の姿が雪に白い八幡の森の鼻を廻つて消へるまで見送つて居たが、頓てガツカリした容姿で雪の上に尻餅つき、枯木の様な皺だらけの両手を合せて、宗吾の去つた方を伏し拜

んだ、彼の老たる雙眼からは止度なく熱湯の様な涙が流れ落つる、頓て片手で涙を拂つた甚兵衛は元氣なくフラ／＼と立上つて暗い湖水の方へと歩いて行く、魔界の様に黒ずんだ、夜の灰色の空からは又一しきり、白いものがユラめき降るのであつた。

(3) 直評
 時は、正保二年三月四日、場所は淺草諏訪町の堀田出羽守正盛が下邸附近。
 今日三代將軍家光が鷹狩りの歸途、豫て氣に入りの正盛が下邸に立寄り暫し疲れを休め様と、其同勢凡そ二百餘人、徒士、徒士目付、供廻り、お小姓、お鷹匠等、序列を直して練り來つた、中にも此日の案内役、堀田正盛は、列の先頭に在りて馬上に従士數名を隨へ、警叱の聲に市民を驚かしながら虎の威を借る狐の如く得意然として己が邸の前歩、數町の處まで來かゝつた、左右の市民共はいづれも土下座して、額を地面に擦り付けて敢て仰ぎ見るものもない。

此有様を馬上の正盛から見ると、恰も西瓜畑に馬を乗り入れた様であつたらう、斯る事に馴れ切つた大名育ちの正盛でも、心地よい春の夕日を浴びながら、將軍の先驅を仕る、今日の彼に取つては、何とも云へぬノンビリした愉快な氣持ちがした、彼は之れからの將軍の接待の事や、數名の愛妾の中間の何れを出したものか、と云ふ様な事や、はては先日邸内の櫻樹の下で、數名の愛妾や近侍の士と共に春の日長を踊り暮らした樂しか